

## 有島武郎「二つの道」

——ツルゲーネフ「ハムレットとドン・キホーテ」の影響——

岡 望

はじめに

有島武郎の評論は数多く存在し、小説家としてだけではなく評論家思想家としても一定の成果を残している。今日有島の思想でとりわけ知られているのはクロポトキンに強い影響を受けた社会主義思想である。有島農場の解放や「宣言一つ」（一九二二）を発表することで第四階級と自身とを強く区別し、プロレタリア文学に論争を巻き起こしたことも有名である。またそういった社会主義的意識とは別に「惜しみなく愛は奪ふ」（一九二〇）のような人間内部の意識に目を向け、深く論考したものも存在する。この評論は有島の代表作『或る女』（一九一九）と結び付けて考えられることも多く、重要な評論である。

そういった中で今回取り上げようとする「二つの道」は一九一〇年五月「白樺」に掲載された有島の初期の評論である。この評論は前述した「惜しみなく愛は奪ふ」の前身として論じられることが多く、この評論自体の内容はあまり話題にされることはない。同時代評も芳しくない。そこで理解を得られない理由として、「二つの道」は具体例は

多いものの抽象的な箇所になるとどこか纏まりがないように見えることが考えられる。理解を困難にしているのは、有島が前提としているものをこの評論では省いていることに由来するからではないだろうか。これから、有島の中で構築された理論の下敷きになっているだろうものに注目していく。そして改めて「二つの道」の内容を考察したい。

この作品の同時代評は乏しく目立つものは小宮豊隆と岩野泡鳴のものである。小宮豊隆は「五月の評論」(「ホトギス」一九二〇・六)で評論よりも詩に近いものであると評した上で「読んで面白いと思うけれども、徹しない心持があった」と書いた。「二つの道」の論については「此二つの道とは、唯二つと云う形だけが等しいもののように思われ、二つの道は唯一つ、唯一筋にすすみ得る所に充実したる人生があるように思う」とまとめている。有島の二項対立的な意図は汲み取らず、それぞれの生き方の肯定というところに落ち着いていよう。岩野泡鳴には一九一〇年十一月「早稲田文学」で手厳しい評価を下され、有島は泡鳴と評論の本題から外れた揚げ足取りにも思われるようなやりとりをすることになる。本多秋五は小宮豊隆の評論の中の「二つの道」の要約を「ずいぶん乱暴な批評」<sup>(1)</sup>と述べており、「有島の原文が透徹を欠いているのも事実である」ともある。また亀井俊介も「二つの道」を「思いが余って言葉が伴わず、空中分解した観がある」<sup>(2)</sup>として本多秋五と似た意見を持ち合わせている。

「二つの道」の一番問題となるのは具体性の部分である。書き出しは二つの道は全ての人に普遍的に存在し、死に至るまでずっと続いているとしている。途中からその道はアポロ／ディオニソス・ヘレニズム／ヘブライズム・霊／肉・趣味／主義・理想／現実・空／色といった例えで言い表されている。趣味／主義や理想／現実はともかく、他の芸術的な比喩は普遍性をもたらすには少し偏っているように思われる。ロトの例えが入り、神話的な要素が濃くなっている。そしてハムレットやヘッダガブラーが持ち出され近代外国文学の領域に近づいている。これらの用語の用

い方から一般的な人生論に落とし込むのが困難であつたから、批評も的を射ないものが多かつたのであろう。

有島の意識下で前提となつてゐることが文章化されていないことも、読みにくさの原因であらう。それは『或る女』や「惜しみなく愛は奪ふ」などから振り返ると、習性的生活や智的生活、本能的生活などに繋がつていくのだからと一見逆算できるように見えるが、それらのニュアンスとは異なつてゐるように思われる。文章の補足が足りていなかったと感じているからこそ、有島は一九一〇年八月「白樺」に「も一度『二の道』に就て」を書かざるを得なかつた。そちらではアポロ／ディオニソスなどの例えは民族の歴史から読み取れる対比的なものであると補足している。「も一度『二の道』に就て」で興味深いのはハムレットの対比としてセルバンテスのドン・キホーテを持ち出していることである。「二つの道」では持ち出されなかつた対比である。ハムレットを「人生に対して最も聡明な誠実な態度を取つた」と有島が記述して「理智を通じて二つの道に対する迷いが現わされて」いるなど、ハムレットに関しては個人的な内面、その生き方に目を向けていた。そして「も一度『二の道』に就て」ではハムレットとドン・キホーテは次のような表現で比較されている。

自分は人生の解決の爲めに、かくの如き苦痛多き努力を爲した人の誠実を疑はうともしないし、又其愚をも嘖はない。然しながら世は何時まで、彼等の間違つた態度を認容して居る程に、進化の鈍いものでもないと言ふ事を付加へねばならぬ。時は過ぎた、而してセルバンテスがドン、クイ、ホーテールで、騎士的理想の捕虜となつた片輪者を、嘲笑したと同時に、セークスピヤはハムレットに於て、理想の桎梏こくごを脱逸した一人の人を描き始めた。即ち理性の解放は必然的に如何なる影響を人心に及ぼすかを、的示したものは欧州近世史の初期より現はれ始めた、人の変化である。此前にも云つた如く、ハムレットは孝子たるよりも、哲学者たるよりも、愛人たるよりも、実行家たるよりも、より人である。ハムレットに当て箝むべき型と云ふものは、ハムレット自身の外には一つもない。彼れは藻掻き迷ひ、苦しんだ。中世期のローマンスにある Hero の面影はハムレ

ットには更らに認めることが出来ぬ。オデッセーとイリヤッドとはハムレットに至って鋭角を為して方向を転じた。二つの道の何れかを選ぶべく余儀なくされた人は、ハムレットに至って自由に両者の間に迷い抜いた。自分は此様な現象を無為義な事と看過する事が出来ない。何故なれば如上の現象は、自分自身の内部にも行はれた事を的確に感ずるからである。

ここではドン・キホーテが「間違つた態度」を取っている側であり、「騎士的理想の捕虜となつた片輪者を、嘲笑した」とセルバンテスは嘲りの対象として捉えている。また中世期のロマンスのヒーロー像をハムレットが持ち合わせていないとあるが、ドン・キホーテに英雄譚を当てはめることはさほど無理はないだろう。ドン・キホーテにも英雄的意識があると認めてもいい。また「何故なれば如上の現象は、自分自身の内部にも行われた事を的確に感ずるからである」と有島が言うように自身の葛藤をハムレットに投影し、ドン・キホーテを敵視していることも読み取れる。

この敵対意識はどうして生まれるのだろうか。ハムレットとドン・キホーテはしばしば対比される対象であるが、この発想の大本となるのはツルゲーネフの「ハムレットとドン・キホーテ」であり、これは一八六〇年にツルゲーネフが講演したものを元にして同年に「ソヴレメンニク」で活字化されたものである<sup>(3)</sup>。一九一八年三月の「新潮」の「文壇諸家年譜」に記された中で有島は一九〇四年に「凡ての学科に興味がなかった。唯モリア博士の中世期建築史には深い研究心を起した。エマアソンを読んだ。ホイットマンの詩に親炙した。ブランドスとツルネゲフに傾倒した。」<sup>(4)</sup>とツルゲーネフに没頭していたことがあつたらしい。

有島がこの著作を確実に読んだという事実は確認出来ないが、しかしながらこのツルゲーネフのこの著作を知る機会には確かにあつた。クロポトキンに傾倒するきっかけとなつた「ある革命家の手記」<sup>(5)</sup>に「ハムレットとドン・キホ

「テ」について言及している箇所がある。有島は「ある革命家の手記」について「クロポトキン」<sup>(6)</sup>でこのように記述している。

無政府主義など申す思想からは対角線的に交渉なき境遇と教育との中に置かれ居たる私は、かゝる傾向に対しては恥しながら無頓着と一種の嫌悪とを感ずるのみにて三十近くに及びたる次第に候が、明治三十七年の頃頻りにゲオルグ、ブランデスのものを愛読致し始め候頃臚げに露西亜に於ける現存の社会状態に嫌らざる諸種の主義を想見し好奇心と申す程の研究欲を感じ始め候折柄クロポトキンの自叙伝の序をブランデスが書き居るのを知り、夫れが読み度き許りに始めてこの稀有なる大著書に接し、さして期待も持ずに本文を読辿り行き候程に、頭が上がらぬ程感心して仕舞ひ候。

有島が読んだこのクロポトキンの書物は坂上博一が言う<sup>(7)</sup>ように「この自叙伝とは、一八九八年九月から一八九九年九月まで一ヶ年間アメリカの月刊誌「アトランティック・マンズリー」に掲載された「ある革命家の自叙伝」を加筆して一八九九年十月に単行本にまとめられた英語版の同名の書である。有島が「頭が上がらぬ程感心して仕舞」うこの著作には、実はツルゲーネフの「ハムレットとドン・キホーテ」のことについて触れている場面が存在する。ニヒリスト故に作者に愛されていないと見られがちな『父と子』のバザーロフの人物像であるが、実際はツルゲーネフはバザーロフを尊敬していたのだと述べる文脈でハムレットとドン・キホーテに話題が移る。

ハムレットとドン・キホーテを論じたすぐれた講演のなかで、彼は人類の歴史をつくってきた人間の型を二つに分けて、それぞれをハムレットとドン・キホーテで代表させている。「なによりもまず分析。それから自己中心主義。したがって信念というものがない。自己中心主義者は自分自身さえも信じることができない。」彼はハムレットをそう性格づけている。「そーい

うわけで彼は懷疑的で、なにひとつやり遂げることができない。ところが、風車とたたかったり、床屋の使う金盥をマンブリーノの魔法の兜だと思ったりする（これと同じようなまちがいを一度もしたことのない人間が私たちのうちにいるだろうか？）ドン・キホーテは民衆の指導者である。なぜかという、民衆がつねにそのあとに従っていくのは、世間の人の皮肉や迫害など問題にもしないで、自分の目にだけ見える目標をひたすら見つめながら、まっしぐらに前進していくような人だからである。こういう人は捜し求め、途中で倒れるが、ふたたび立ちあがって、もちろんのこと最後には見つけた。ところが、ハムレットは懷疑的で善を信じない。しかし悪は信じないのでなく、これを憎んでいる。悪と虚偽は彼の敵である。彼の懷疑主義は無関心ではなく、最後には彼の意志をすりつぶしてしまう否定と疑惑でしかない。」

ここに述べられているツルゲーネフの考えこそ、彼とその主人公たちとの関係を解くほんとうの鍵だと私は思う。ツルゲーネフや彼がもつとも親しくしている数名の友人たちは、多かれ少なかれハムレット型なのである。彼はハムレットを愛し、ドン・キホーテを尊敬している。したがって、バザーロフをも尊敬しているということになる。彼はバザーロフのすぐれている知性をじつによく描き、その孤立した立場の悲劇的な意味をよく理解している。しかし、彼はハムレット型に近い主人公たちには病床の友人に対するような優しい詩的な愛情をそそいでやっているが、バザーロフを同じ愛情で包んでやることはできなかった。そのためには、彼は適任ではなかったのだろう。<sup>(8)</sup>

クロポトキンのこの文章を見ると、ツルゲーネフのバザーロフへの愛情があるかどうかを探るときに、ハムレット型の主人公たちには愛情が注がれているが、バザーロフには出来なかつたということが強調されている。ツルゲーネフはバザーロフがドン・キホーテ型の人物に近いため彼を尊敬しているというように読み取れよう。バザーロフは既存の権威に属さず体制を否定し、科学を信奉する。その革新的な性質は民衆を啓蒙するドン・キホーテ型にやはり近い。そして「ハムレットとドン・キホーテ」をクロポトキンがどのように引用しているかという、ドン・キホーテにおいては民衆の指導者であり不屈でひたすら目標に向かっていくという部分を引用している。一方、ハムレットは

自分自身さえも信用できない自己中心主義者であり、懷疑主義によって自滅していくと引用している。

クロボトキンに引用されたこの「ハムレットとドン・キホーテ」の箇所は少なくとも有島は読んでいる筈である。「ある革命家の手記」を読んでいることは確認できるため、そう考えて差し支えはないだろう。そしてこのクロボトキンが引用している部分以外においても、有島はかなり意識していると思われるところも存在する。有島が全文を読んだという保証は出来ないが、クロボトキンも取り上げているこの性格分析は有島の「二つの道」を読む上で参考になるだろう。クロボトキンはハムレットとドン・キホーテの優劣は決めていない。しかし「セルバンテスがドン、クイ、ホーテで、騎士的理想の捕虜となった片輪者を、嘲笑した」とあるようにハムレット型の優位性が確かめられる。

そして、ツルゲーネフの「ハムレットとドン・キホーテ」の本文を比較していくと「二つの道」と対応していくところが見受けられる。引用はそれぞれ別の段落から引き、便宜上番号と注目すべき箇所には傍線をつけている。

①・ドン・キ・ホーテとハムレットが同時に現れたのは、意味ぶかいことに思えると、私は申しました。わたしが思うに、この二つの典型のなかに肉づけされているのは、人間本性の二つの基本的、対照的特徴——いわば、人間本性の回転軸の両端なのであります。

・ いずれにしても、次のようにいって、たいした誤りではないと思います。——つまり、すべての人にとつて、この理想、この生存の基盤と目的は、自分の外側にあるか、でなければ、自分自身の内部にあるか、どちらかなのです——

②ドン・キホーテは何を表現しているのでしょうか？ 信仰、これが第一であります、何か永遠なもの、不動のもの、真理、一言でいえば、個人の外側にあり、容易に個人には与えられず、奉仕と犠牲を要求するけれども、たえまない奉仕と、犠牲の力によつて獲得される真理——この真理に対する信仰なのです。

③そうです、くりかえして申しましょう——ドン・キホーテ型は発見し——ハムレット型はしあげられるのです。しかし、ハムレット的人物がすべてをうたがいがい、何ものをも信じていないとすれば、どうして何かをしあげることができらるだろう——と、質問されるかと思えます。その問いには、こう反論しましょう——巧妙な天の配列によって、完全なドン・キホーテがいらないとまったく同様に、完全なハムレットもない——それはただ、二つの傾向の極端ならわれにすぎず、作家が二つのことなつた道に立てた道標にすぎないのだ、と。人生はこの二つの道標にむかつて進んでいますが、決してそこまで行きつくことはありません。

そしてそれぞれの番号に対応すると思われる「二つの道」の本文を挙げる。ただし②は「も一度「二の道」に就て」である。

①二つの道がある。一つは赤く一つは青い。凡ての人が色々の仕方で其上を歩いて居る。或る者は赤い方をまっしぐらに走つて居るし、或者は青い方を徐に進んで行くし、又或者は二つの道を両股をかけて欲張った歩き方をして居るし、更らには或者は二つの道の分れ目に立って、凝然として行手を見守つて居る。揺籃の前で道は二つに分れ、夫れが松葉つなぎの様に入れ違つて、仕舞に墓場で絶えて居る。

②然らば直覚が齎らすと称する所の信仰なるものは、果して物の真に徹入して居るであらうか。是れも物の真に徹入し得ぬと断言する事が出来ぬと思ふ。然しながら同時に夫れが、絶対事相を掌握し得るとも云へぬ筈だ。加之信仰の事は絶対的に個人的の事である。哲学にあつては、理を推して最後の結論に到達するのであるから、若し其論理に悦服する人さへあれば、其哲学は人から人へと伝へて行く事が出来る訳であるが、信仰に至つては全く個人的経験であつて、各個が自ら其経験を体達しなければ、信仰の伝播は全く出来ぬのである。夫れ故信仰は全然主観的のみに価値を有するもので、客観的には、夫れが実世間に現はす効過を除いて、何等の価値を生ずるべきものではない。甲某が有する信仰なるものは、乙某丙某に取つては、無価値なものである。

③二つの道は人の歩むに任せてある。右を行くも左を行くも共に人の心のままである。ままであるならば人は右のみを歩いて満足しては居ない。又左のみを辿って平然としていることは出来ない。此二つの道を行き尽くしてこそ充実した人生は味わえるのではないか。所が此二つの道に踏み跨がって、その終わる所まで行き尽くした人が果してあるだろうか。

「ハムレットとドン・キホーテ」と「二つの道」とを比較して、参考になると思われる箇所がこれらである。

①では二元論で似ている箇所を挙げた。「二つの道」で「赤い道」と「青い道」で例えるような対照的特徴が当てはまるであろう。そしてツルゲーネフはこの二元論は自分自身の内部と外部で分かれるとし、有島のように他の「道」を進む者を意識する場合はない。有島にとって「道」とは人生の分岐点を指す意識が強い。個人内部で完結する「道」は、有島が自己を投影しているハムレットのものがある。有島は「道」を平面的に距離をもって広がっていくものと考えているが、ツルゲーネフの場合、「人間本性の回転軸の両端」として対照的特徴を見ている。人間本性は両端にそれぞれの性質が宿っているが、その性質お互いに繋がっているようである。またそれぞれの性格の差は生存の基盤と目的が個人の内部か外部のどちらにあるかから生じているが、有島の場合は個人の内外を問わない書き方をしている。有島にとって「道」は空と色、趣味と主義などに置き換えられるため、個人の内外に止まらないようである。有島は後々、ドン・キホーテなどを対比的に加えて考察を深めている。「道」に関しては、ツルゲーネフの言うような人間の性質というより、「或者は青い方を徐に進んで行く」や「或者は二つの道を両股をかけて欲張った歩き方をして」いることから、「道」をどう選んで進むかが問題となっている。

②は宗教に関するが、これは概ね食い違っている。ツルゲーネフは信仰を個人の外側で働くもの、つまり二元論の片棒を担うものとして捉えている。これは個人が奉仕と犠牲を捧げることによって、真理を獲得しようとするその姿勢は好意的に見られている。その一方、有島は宗教に関しては一貫して否定的である。「徹入し得ぬと断言す

る事が出来」ないと譲歩するものの、物事を把握できるとは限らないと説く。宗教をあくまで個人的なもの、主観的なものとして捉え、客観的には何の価値もないと批判している。この事から有島の考える二つの道は哲学のように伝達可能なのだと認めようとしていることが分かる。ツルゲーネフは個人の性格分析の典型としてハムレット型とドン・キホーテ型を考えたが、有島は普遍的な価値観を見出そうとしている。ツルゲーネフがドン・キホーテを高く評価する信仰は個人に由来し、真理を獲得できるものであるが、有島はそこを否定したかったようである。ツルゲーネフの言うこの真理を有島は共有できず、その個人でだけ見出せる価値を拒絶した。この捉え方の差は極めて大きい。有島は「二つの道」の段階では宗教に関してはほとんど言及しなかった。中庸を迷信と呼び、それが宗教以上に執着性を有すると述べるだけである。ただ有島が「二つの道」の理解を得られなかったため、参考にしたであろう「ハムレットとドン・キホーテ」のドン・キホーテの評価に関わる部分を取り上げて「も一度「二つの道」に就て」で論を補強しようとしたのである。ツルゲーネフはドン・キホーテを信仰の体現者と高く評価しているが、有島は宗教に関しては否定的に捉えている。空／色という一見宗教的な対比も「二つの道」で見られたが、これは「民族の歴史」やその跡から対比を捉えようとしたもので、宗教的要素は薄い。

③はかなり酷似していると言っているだろう。ツルゲーネフは完全なドン・キホーテも完全なハムレットもないと前置きし、二つの道標にいきつくことはないと言う。そして有島も終わりまで行った人物はいないと考えている。ツルゲーネフは個人がそのキャラクターになることはないと述べているのは分かりやすいが、有島の場合二つの道が普遍的なものとして様々な語を入れて説明するため把握しづらい。また両者の違いで目につくのは有島の「此二つの道を行き尽くしてこそ充実した人生は味わえるのではないか」という所である。ツルゲーネフは道を行き尽くしても心が満たされるかどうかには全く言及していない。それぞれのキャラクター性が読者の胸を打つぐらいまでしかいか

ないのである。ただ有島は二つの道を行き尽くした場合を説明しないため、この詳しい点は不明である。

ツルゲーネフの分析は人の性格の傾向に関心を示している。そして物語の理想的な人物像を考える論考であるが、有島の場合は人生観に興味を示している。有島の芸術観は人生と密接に関わっており、本人も度々そのことを口に出している。一九一七年十一月から十二月「北海タイムズ」に掲載した「自己の考察」では「又文芸の一主潮として芸術即ち芸術の主張がありそれは二つの考え方があるという。その一つの「一つは人生が芸術を作るのではなく、芸術が人生を作るのだというオスカーワイルド等の主張」に有島は「私は前の方の主張に対しては相当の共鳴を感じずにはいられ」ないと同調している。普遍性を説いている「二つの道」ではあるが、有島個人の場合を見ると、似たような論が存在していることが確認できる。

有島は自身の論を構成する上で、ツルゲーネフの論理の枠組みから発想を始めている。二項対立や宗教、そもそも道の性質などである。ツルゲーネフの論理は積極的・消極的な面から考察しており、個人的な性質に止まる。しかし有島は二元論で人生観・芸術観を図つていこうとしていた。それでもハムレットにこだわりを強く持つていることは見て取れる。ドン・キホーテ型の性質は批判されているところもあった。クロポトキンの引用でも自己中心主義の悲劇的なハムレット像が抜き出されている。バザーロフを巡るクロポトキンの文章からはハムレットの性質が濃く読み取れる。有島が「革命家の手記」を読んだ際、ハムレット型の方が恐らく印象に残る。

また有島がハムレットにこだわっていたのは他の文章からも確認できる。有島は一九一〇年二月「白樺」に書評「ハムレット劇研究平田元吉著」を投稿しており、ハムレット像に関して「圧倒する猛烈な発作的感情や、陰鬱な厭世的思想や時によると冷酷な厭人的傾向や、超越的な哲学的思索やが、紛糾して相剋して居た、一個徹底的な懷疑の人だと見たいのである」と示している。この「懷疑」的なハムレット像はクロポトキンの引用した「ハムレットとド

ン・キホーテ」でも示されている人物観と共通するものである。

また一九〇八年三月の「イブセン雑感」<sup>(9)</sup>でも有島がハムレットを高く評価するところがある。

而かも彼の死と生とが一片の風刺として終らず、痛切なる悲劇として残れるは何ぞや。自己をすら批評風刺する透徹の眼あるものは悲劇の主人公たり得べき最大の資格を有する者なればなり。

この引用を見てもハムレットが評価される原因が痛切な悲劇であるからとしている。また、「自己をすら批評風刺する透徹の眼」があるというのも「ハムレット劇研究」で言及されている徹底的に懐疑だという箇所に対応する。悲劇の渦中において理性の存在が一際強調される。そして「二つの道」でも「悲劇が同情を牽く限り」二つの道は解決されないと述べており、有島のハムレット観は一貫している。悲劇性と理性の二点が高く評価されていた。

「二つの道」の評価が高くないのは恐らくこのような有島のハムレット観が共有出来なかつたことが大きいと思われる。これは「革命家の手記」と「ハムレットとドン・キホーテ」を通して成り立つ評論であると思われる。アンチドン・キホーテの立場を取る有島はハムレットを補強する意思を強く示している。転んでも進もうとするような動的なドン・キホーテの性質を否定すべく、道に迷いを生じるハムレットを描く。そして、強い信仰を持つドン・キホーテを、信仰自体の批判に加え、傑出した理性を持ち合わせるハムレットを「二つの道」で描いた。この評論の核となるのは、やはりハムレットなのである。アポロ／ディオニソスやヘレニズム／ヘブライズムなどを持ち出して様々な二項対立を連想させていたが、それはツルゲーネフの論から発展させるべく持ち出したものであろう。普遍性を強調して、一般論に落とし込む意図があったと思われる。

その点で「ハムレットとドン・キホーテ」と比べると、道の広がり方に有島のハムレット観の展開が認められる。「人の世の全ての迷いは此二つの道がさせる業である」と言う。各人それぞれに遭遇する分岐が問題になる。この道について有島が三節で構図を述べている。

松葉つなぎの松葉は、一つなぎずつに大きなものになって行く。最初の分岐点から最初の交差点までの二つの道は、離れ合  
い方も近く、程も短い。其次ぎのは稍速く稍長い。夫れが段々と先に行くに従って、道と道とは相失う程の間隔となり、分岐  
点に立って見渡すとも、交差点のありやなしやが危まれる遠さとなる。

これ以降は各人の道そのものにフォーカスが当てられ道そのものの考察に移っていく。道の連続性について語るの  
はここまでなのである。二股の道を松葉に例え、松葉つなぎの模様に導いていく。道そのものの距離も考慮され、最  
初は横の松葉との間隔と縦の松葉の距離は短く段々伸びていく。「仕舞いに墓場で」道が絶えるのだから、始まりは  
生と定義できる。自らをハムレットに投影し同情するその精神は「交差点のありやなしやが危まれる遠さ」に起因す  
るものであろう。道の迷いは縦に進むときにしか現れないからである。しかし、「道と道とは相失う程の間隔となり」  
という横の間隔はこの評論で語られていない。「も一度「一の道」に就て」でも松葉の一つについて有島は考えを深  
めている。

見えなくなっていく横の道は根本的な生から分岐していく道である。それが無数に分岐していつて松葉繋ぎのどこ  
かに自分が位置していることになるだろう。そう考えると最初の分岐は自分の出生の条件であり、生から死まで松葉  
つなぎが続いていくことになる。

このように「道」は構図を描くことが出来る。縦と横で人生のどの地点かが位置づけられる。そして「凡ての人が色々の仕方で其上を歩いて」いるように他者の生き方の姿もこの構図によって捉えられうる。そのように有島はまず道の全体像を描いたのである。人間は相対界を彷徨う生き物であるとしているが、その相対界はこのような様相を示す。ただ「二つの道」の焦点となるのはハムレットにまつわる道となるため、松葉つなぎの一つにどうしても論が進んでいくことになった。

ツルゲーネフは個人の内部と外部でドン・キホーテ型とハムレット型を分けたが、有島はドン・キホーテ型を無くすことによって、ハムレット型の特徴となる懐疑的性質が際立ち「二つの道」において存在感を表した。それは決断を下し行動に移ろうとせず、悩み迷う思索的な性質である。つまり判断を保留することで、どの道を取るか考えようとするその思考が「二つの道」の本質となる。本文の「更らに或者は二つの道の分れ目に立って、凝然として行手を見守って居る」という時点の生き方がハムレットの位置である。

ただこうして考えていくと、ハムレットの前にある二つの道とはそれぞれどのようなものであったか疑問に残るのである。「二つの道」においては「人生に対して最も聡明な誠実な態度を取つたからである」と評価し理智を通じて二つの道に対する迷いが表れているとしている。そして「も一度「二の道」に就て」では自らの行為に良心の呵責を感じ、自己矛盾をきたしていることにハムレットの悲哀が表れるとしている。有島はハムレットの「道」の内容についてほとんど言及していない。物語で考えるならばハムレットの「To be or not to be: that is the question」という有名なシチュエーションの場面がまず想起させられる。父を殺したクロードィアスに復讐を誓うが中々証拠が見つからず、耐え忍ぶか、果敢に戦うかを苦悩するという場面である。しかしながら有島はその「道」を具体的に言い表すことはなかった。それは即ち「道」自体の問題ではなく、生き方の問題だからである。松葉の始点で苦しんでいる。

自己矛盾を抱えるハムレットが、自己矛盾を当然受け入れられるヘッダに成りうることに拒否感を示す有島の姿はハムレット型そのままである。この点を踏まえれば有島が「ハムレットとドン・キホーテ」のハムレット型に入り込んでいることが確認出来る。

「ハムレットとドン・キホーテ」の二つの性格分析を有島が「二つの道」で取り込んだ結果、有島はハムレット型に興味を引くことになった。論の大枠をハムレットに絞りこみ、「も一度「二の道」に就て」で対比を強調するためドン・キホーテの話を取り上げる必要があったのであろう。もともと自身をハムレットになぞらえたい有島の意識を示すには普遍的な道を論じる必要性は少ない。しかしそれでも二つの道が誰にでも存在するとしているのはツルゲーネフの幅広く当てはまる性格分析の内容から引き上げたからであらう。

## おわりに

「二つの道」の根幹部分はハムレットにあるとして論を立てたが、それぞれの道自体を分析することが出来なかった。恐らく有島の想定していたハムレットの二つの道は総合的な印象から成り立っているため、具体的に述べることは難しいと思われる。また、このハムレット像が指摘出来るような作品を取り上げられなかったため、断片的な研究に留まった。

今回は特に初期の評論に目をむけて論じたため、有島評論史の有機的な繋がりを欠いたように思われる。また長谷川天溪が「現実暴露の悲哀」<sup>(80)</sup>でハムレットを理想を追いつつも混沌とした現実世界に疲れ悲願を達成できなかった人間としており、文壇でもハムレットに注目していた時期があったため、そこを整理しつつ今後の課題としていきたい。

\* 「二つの道」本文は『有島武郎全集』七卷（筑摩書房一九八〇年四月）を参照した。初出は「白樺」一九一〇年五月。なお引用にあたっては旧字体は新字体に改めた。

註

- (1) 本多秋五「解題」『明治文学全集七六 初期白樺派文学集』所収著作者代表武者小路実篤筑摩書房一九七三年二月  
 亀井俊介『ミネルヴァ日本評伝選 有島武郎——世間に対して真剣勝負を続けて——』  
 ミネルヴァ書房二〇一三年一月
- (2) ツルゲーネフ「ハムレットとドン・キホーテ」藤沼貞訳（『世界思想教養全集 近代の文芸思想』九卷伊藤整訳者代表河出書房昭和三八年四月）初出…一九六〇年一月十日に「困窮文学者・学者援護会」の公開講演会で行った講演。初めて印刷されたのは一八六〇年の「ソヴレメンニク」一月号。なお「ソヴレメンニク」は「同時代人」と訳されることが多く、その同時代的意義は「56〜62年のロシアの大改革期に「同時代人」誌は唯物論的思想の普及や自由主義の批判的論調にあると解される。（『同時代人』佐々木照央『集英社世界文学事典』集英社二〇〇二年二月）
- (4) 有島武郎「原年譜」『有島武郎全集』十五卷 一九八六年九月所収（初出…『文壇諸家年譜（二六）』「新潮」一九一八年三月号）全集の「解題」に「底本には「本年表は記者の親しく諸家に就いて得たる材料に成る。その正確と詳密とは記者の密かに自負する所、文壇の好史料たる可き也」と前書がある。従ってすべて武郎自身の手になるとは必ずしも言い得ないが、委細に涉り十分に意を体していると判断され、ひとまず「原年譜」として収める」とある。
- (5) クロポトキン『ある革命家の手記（下）』高杉一郎訳岩波書店一九七二年二月（初出は「アトランティック・マンズリー」『ある革命家の手記』一九八八年九月〜一九九九年九月連載分を加筆して単行本化。初版は一九九九年）この本の全訳版は少なく、全訳版は一九六二年の平凡社から出版された『世界教養全集』と岩波文庫版のものだけである。訳はどちらも高杉一郎であり、岩波文庫版は平凡社版を改稿したものであるため、こちらを採用した。
- (6) 有島武郎「クロポトキン」「新潮」一九一六年七月
- (7) 坂上博一「有島武郎のヨーロッパ紀行（五）」『明治大学教養論集』一九九二年三月
- (8) 註(7)と同じ
- (9) 有島武郎「イブセン雑感」「文武会会報」五三号一九〇八年三月・脱稿一九〇六年四月
- (10) 長谷川天溪「現実暴露の悲哀」「太陽」一九〇八年一月